

38 年間? の思い出

石川 良 宣*

My Memories of 38 Years Life at ERI

Yoshinobu ISHIKAWA*

もう幾つ寝ると!

私の場合、♪♪もう幾つ寝ると「お正月」♪♪、ではなく「定年」なのである。私が定年のときは大学法人化への切り替えの年であり、退職金が7%カット、おまけに60歳で年金(技官の場合)を受け取ると30%カットされ『トリプル』に愉しくないことが揃い踏みする年なので、『♪♪もう幾つ寝ると「お正月」♪♪』なんて浮かれていられないのだ。下手をすると「定年」は「諦念」(あきらめろ)になりかねない。この先どうなるか本格的に不安だらけである。

愚痴はさて置き、定年を迎えるにあたり自分の歩んだイバラだかバラバラだか解からない道(私はトラブルが多く、人に助けてもらったり迷惑かけたり無茶苦茶したり)を辿ってみようと思う。

イントロ (東大と私との大変な関係?)

定年まで38年間である。「38年間というとな人生の半分だな」なんて云うと、悪友に「76歳まで生きるのか」と云われる。まあ、憎まれっ子世に憚る(はばかり)である。がんばって生きようと思う。

ところが、東大との関わりを全てトータルすると、38年どころではない。かるく半世紀以上になりそうだ。

先日、初対面の人に、

「職場はどこですか？」

「トウダイです」

「どこのトウダイですか？」

「近所のトウダイです」

「トウダイ(もと)暮らしですか？」

ふつう、「灯台下(もと)暗し」と云って、足元は光が当

たらず事情が見えにくいという意味なのだが、私の場合は「東大下(もと)暮らし」で、東大がよく見える「ご近所」という意味なのである。

赤門まで5分の距離である。私にとって東大はもちろん職場であり、子供のときは広大な敷地を持った遊び場であり、病院であり、父の職場であり、通りすがりにトイレを借りたこともある。東大と私の運命の糸は生まれたときから繋がっていたようだ。

生まれてすぐ死に損なう

私が生まれたのは1943年、太平洋戦争真っ只中である。戦争中私自身も生まれてすぐ一大事である。全身真っ青、仮死状態である。尻をひっぱたかれたりして、何とか蘇生した。しばらくすると今度は黄色くなり始めるのである。真っ青から真っ黄色、重症黄だんである。一難去ってまた一難。親はほとんどあきらめかけたのである。戦争中で病院にはろくな設備もない。それでも医者懸命に治療を続け、何とか黄だんを押さえ込んで命をとりとめたのである。私は生まれてすぐ青くなり、次に黄色になり、私の命のシグナルは青、黄、赤色と交差点の信号のように変わり、何とか赤ちゃんになったのである。

私は生まれてすぐ死にかけ、歩ける頃になっても歩くことができず、首がなかなか据わらず(未だにちゃんと据わってないが)、病名すら分からなかったのである。

私たち一家が茨城から東京へ出てきたのは1948年、私が5歳の時である。父が史料編纂所へ就職したのである。そこで、近所の有名な病院ということで東大病院で診てもらったのである。病名は脳性麻痺。やっと分かったのである。病名は分かっても、治るわけではない。それから週に何日か通院するようになった。治療と云っても、ゴムのローラーみたいなものの表面を水で湿らせて電気を流し、手とか足の表面をころがすのである。これは体がビリビリしびれ、拷問みたいなものである。しばらくやったが、効果がないことにシビレを切らし、止めてしまった。

2002年9月5日受付, 2002年10月28日受理.

*東京大学地震研究所技術部技術開発室.

*Laboratory for Technical Service and Development, Earthquake Research Institute, University of Tokyo.

歩くためのリハビリはしばらく続けた、なにしろ小学校に上がる直前まで階段を這って上り下りしていたのだから、とにかく何とか東大病院のおかげで二足歩行ができるようになったのである。小学校へ入学してもしばらくは、授業を早退して東大病院に通い、診察やリハビリを受けた。年間の3分の1は東大病院通いだった。

その頃、私の父は1948年から1956年まで東大史料編纂所で古文書の解読と研究をしていた。と言っても中身は昔々のラブレターが多かったようだ。仕事がラブレターの解読とは恐れ入るが、例えば源氏物語にしてもラブストーリーの研究なのだから。その父の話によると、史料編纂所には色々変わった人がいたようで、例えば「ハナクソ」をほじって小ビンに詰めて時々取り出して舐めていた先生、マユなどを描いて薄化粧をしていた男性の先生など、人間の「資料」としても面白い人が集まっていた。その頃は、私自身が東大に就職するとは思わなかったし、東大地震研で予想もしないような私にとって人生最大（今のところ）の重大事件が起きる（起こす？）とは夢にも思わなかった。

なぜ地震研に就職したのか

高校生の時、あまりに勉強をしないので、親は苦しい家計から家庭教師を頼んでくれたのである。これまた、ご近所ということで、東大の船舶工学の学生さんがやってきて「大船に乗ったつもりで私に任せなさい」と云われ、さすが船舶工学と思ったのだが、教えられる私はレベルが低く、船酔い気味、宿題を出されてもなかなかできず、あまり私のできが悪いので先生が泣き出してしまったのである。

とにかく大学の電子工学科に何とか入ったのだが、何故むずかしげな電子工学を選んだのか、我ながら奇妙な選択方法で、土木・建築は現場がコワイし、化学はドカンとバクハツするとコワイし、強電はシビレてコワイ。結局、電子工学が一番安全だということで入ってしまった。

大学に入れば人生何とかなるだろうという甘い考えでいた私は、20歳頃より、就職についてずいぶん悩み始めていた。障害者が大学を出て普通に就職し、結婚し、子どもをつくり、家庭を持つことができるだろうか。大学在学中に大変不安になりノイローゼ気味になっていた。特別に勉強ができるわけでもない。それどころか、絵に描いたようなできの悪い劣等生だったのだから。

心配した母は主任教授に相談した。主任教授は東大名誉教授だった人である。だからこの大学の卒業生は東大への就職やドクターを取りに行く人が多かったのである。

地震研には先輩の岩田さんと佐々木さんがおられたのである。当時、松代地震が活発な時で人手を必要としていた。岩田さんは大変世話好きな方で、主任教授に頼まれ、即決で私の採用が決まった。身分は非常勤。私にとっては不安な状態から抜け出したために地震研に入ったが、非常勤

では不安の解消はされなかった。

地震計測室

1966年、私の所属した部屋は萩原尊禮研究室の地震計測部である。構成は岩田氏（助手）を頭に技官3人、非常勤5人、の9人が一部屋にいたのである。私の仕事は地震記録の読み取りと地下地震計の記録の交換、HES地震計のフィルムの現像などである。地震の読み取りは「煤書き」と呼ばれ、アート紙を記録用ドラムに巻きつけ、石油ランプで煤をつけ、細い金属の針で記録を描き、記録が終わったところでドラムから紙をはがしニスで定着したものである。この記録をルーペで読むのだが、夏は気温が高いのでニスがベトつくため、我々は白衣を着、腕にアームカバーをハメ、薄い手袋をして警察の鑑識課のできそこないみたいな格好で仕事をしたのである。地下地震計の記録の交換は二日毎に取り替えていた。地震計は大森式長周期、石本式加速度、萩原式変位及び速度計等で全て煤書きである。煤書きはかなりの熟練が必要で、均等に煤を付けるのが至難の技で、たとえて言うならば豚の丸焼きと同じで、豚（地震計のドラム）を回転させながら火（石油ランプ）で徐々に炙っていくのである。ここで難しいのは回転の速度と火の横移動の速度をシンクロさせること、これを間違えるとウエルダン（黒焦げ）になるかレア（生焼け）になり、ミディアム（程よく）に煤が付かないのだ。最初は黒焦げ、白焦げ悪戦苦闘して何とかマスターした。

松代地震で遭難

1965年8月から松代群発地震が始まっていた。私が入った1966年4月には有感地震がピークを迎え、1日600回を超えた。2分半に1回である。現地へ出張で旅館で泊まると船に酔ったような気分になるのだ。震度3、4、5になるとドカンと大砲のような音がして電信柱が揺れるのが見えるのである。旅館の建物は古く100年以上建っている代物なので、揺れるたびに壁と柱が離れ、隣の部屋が見えて、お互いに目が合ってコンバンワなのである。

その後松代群発地震は長期化し、観測は強化され、私は現地観測班に組み入れられた。観測点は保科温泉、2食と昼おにぎりつき800円で10泊で次の人に引き継ぐのだ。観測は煤書きの取替え、HESの取り替え。HESは萩原式電磁地震計の略である。最初ヘスと聞いたときはナチスドイツ親衛隊のルドルフ・ヘスを思い出した（ナチスの機械がこんなところにあるはずがない）。とんでもない勘違いである。もう一つの観測はトリパー観測である。高感度（30万倍）地震計を3台並べて一日数時間オシロペーパーに抜き取り観測をやるのだ。高感度なので人間の歩幅が判り、男、女、子供などの区別がついた（ホント？）そうだ。

保科の冬は雪が盛大に降り綺麗な雪景色になるのだが、

その雪で私は遭難騒ぎに又なってしまった。又と書いたのは学生の時、八ヶ岳で戦後はじめての遭難騒ぎを経験しているのである。遭難のベテランでありプロだ、なんて威張ってはいけない。懲りずにドジッただけ。その時私は、保科へのルートは幾つかあったので菅平を経由してバスで行こうとしたのである。ところがバスは路面凍結で途中まで、後は徒歩で菅平を降りなければならない。冬の日短く辺りはとっぷり暗くなっていた。暗い上に目いっぱいツルツルに凍った坂道を降りなければならない羽目になってしまった。とにかく歩き始めたがツルツルスッテンである。「七転び八起き」と言われるが、七回転んでも八回目に起きられず転びっぱなし。おまけに真っ暗で寒いし、だいぶ時間も経ってしまった。懐中電灯は心細く弱弱しく赤みを帯びた光を揺らめかせていた。暗い山道をたった一人で歩くのは恐怖だ。時間が経てば経つほど恐怖は増大していくのである。前の八ヶ岳の時も、同様に増大して行く恐怖に後ろから追いかけられながら、歩いたのである。今度はおまけにツルツル滑る。焦れば焦るほど転んでしまう。気を落ち着かせるために気付け用梅酒を飲む。少し落ち着く。もう一杯飲めばもっと落ち着くはず。ドンドン落ちてきた。そして調子に乗ってしまった。5杯も飲んでしまった。過ぎたるは及ばざるが如し。もうイケマセン。酔っ払って足が勝手に滑って転んでしまう。歩くと言うより転びながら滑り降りてきた感じである。ただ幸いなことに、滑り降りたおかげで歩くよりスピードがついたようで、思ったより早く切り抜けることができた。それに大きなザックに衣類を沢山詰め込んでいたので、仰向けに転んでもザックがクッションの役目をしたため打撲は軽くて済んだのである。何とか保科に着いたのは22時。あまり遅いので遭難したかと思われてしまっていた。この一件で、交代要員だった唐鎌さんにずいぶん心配と迷惑をかけてしまった。

地震データ読み取りの出前出張

地震計測部では、地震波形読み取りを早くするため、いかに早く記象を送ってもらうかである。宅急便など無い時代、国鉄の列車の車掌に頼み、私は上野駅へ毎日取りに行かされたのである。もっと早く記象を読むためには記録を呼び寄せるのではなく、こちらから記象に近づく読み取り

の出前である。

松代に「計測の読み取り部隊」が出張し、現場で地震をリアルタイムで感じながら、震度の大きい時は机にしがみつきながら地震を読み取る。記象上の地震の波とリアルに体感したことが比較できるのである。今は何でもテレメーターで送れる時代、しかもデジタル化されてしまっている。実際にどんな揺れなのか解からない。データを見て恐怖を感じる人は極僅かだろう。そう言う意味で、松代の現地読み取りは貴重な体験であったと思う。

ボイス・ゴーストと地震ナマズのお化け

体験と言えども思い出されるのは保科での幽霊体験だ。幽霊は一度「おめにかかる」機会があればと思っていたが、会えば会ったでやっぱり怖いものである。夜中の2時頃(ちょうど草木も眠る丑三つ時)、耳元で女性のすすり泣きが聞こえるので恐る恐る目を開けた。隣には筑波観測所の渡辺(兄)さんが静かに寝ている。ほかは誰もいない。女性のすすり泣きなのでナベさんであるはずがない。声はすれど姿は見えず、廊下に飛び出したが誰もいなかった。その後懲りずに同じ部屋に一人で何遍も泊まった。今度は姿を見ようと寝る時「明かり」を点けたが(本当は怖いから「明かり」を点けた)、期待したボイス・ゴースト(声の幽霊)はおめにかかることができなかった。

ところが、残念だなと思っていたら夜中にゴロゴロどろどろと背中からお腹にかけて音が響いてきたのである。寝ぼけていたので、夕べ旨いものを食いすぎて腹具合が悪いのかと思ったが、どうやら地の底からである。オノレ今度は妖怪変化かと飛び起きた。起きると何でも無い。寝ると又ごろごろと音がする。何のことは無い、地鳴りだったのだ。震源が少し遠ざかり、ドーンと言う音がゴロゴロに化したのだった。地元松代の人たちが地震が起こると千曲川の大ナマズ妖怪のお出ましだ、と言っていたように、これはまるで地震ナマズのお化けが出てくる音である。

その後松代地震はなかなか終わらず1970年までに地震総数64万8千回を記録した。

今回は松代地震以降の話をしたと思います。

途中ですが、この様な醜文珍文を掲載させて頂いた技術研究報告編集委員会の懐の深さと寛大さに敬意を表します。